

カンショ「コガネセンガン」の早掘栽培技術

富山一男・横山英二・*轟 篤・**川上 求

(宮崎県総合農業試験場畑作園芸支場・*宮崎県総合農業試験場・**宮崎県小林農業改良普及所)

Kazuo TOMIYAMA, Eiji YOKOYAMA, Atusi TODOROKI and Motomu KAWAKAMI: Cultivation Technics of Early Harvest for Sweetpotato "Koganesen-gan"

カンショは、宮崎県の畑作地帯の重要な基幹作物であるが、昨今の厳しい需要事情や営農条件の下で生産は頭打ちの状態にある。このような動きの中で8~9月掘りの焼酎原料用の需要が増加している。そこでコガネセンガンを対象にした早掘り栽培法について茎頂培養苗の利用も含めて検討を行った。

1. 試験方法

試験1 (1989年) : 試験は、当支場内の黒色火山灰砂壌土圃場において、植付期 (①4月18日, ②4月26日, ③5月10日); 掘取期 (①8月22日, ②9月6日), 栽植密度 (①標準: 417本/a, ②密植: 625本/a) を組合せた試験区構成で実施した。

試験2 (1991年) : 上記圃場において、苗の種類 (①茎頂培養初年目苗: 初年目苗, ②同3年目苗: 3年目苗, ③既存のウイルス罹病苗: 罹病苗), 掘取期 (①8月12日, ②9月2日) を組合せ、4月15日植付け, 栽植密度417本/a で実施した。

両試験とも、透明ポリマルチ栽培, 施肥量 (kg/a) はN:0.5, P₂O₅:1.5, K₂O:2.0で全量基肥とした。

2. 結果及び考察

試験1: 4月植え, 8~9月掘りの可能性について検討を行った。4月18日植えでは5月10日植えに比べ地上部生育量はやや少なかった。収量はいずれの掘取期でも早植えほど多収を示し, 5月10日植えに比較して4月18日植えで25~33%, 4月26日植えで12~17%増収した。4月18日植えでは8月22日掘りで270~280kg/a, 9月6日掘りで310~350kg/aの収量が得られた。しかし, 密植による増収効果はみられなかった。切干歩合は4月18日, 26日植えが5月10日植えより若干高かった (第1図)。一方, 4月18日植えでは5月10日植えに比べ形状が長いも化する傾向が認められた。このように, 4月中旬に挿苗し8月下旬~9月上旬に掘取ると300kg/a程度の収量が得られることが明らかになった。

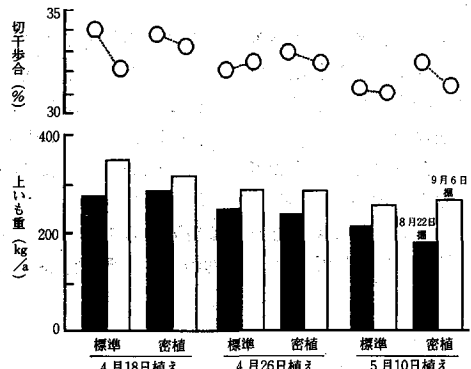
第1表 生育並びにいもの外観的特徴 (試験2)

区 別	茎葉重 (kg/a)	大小	外皮粗滑	形 状		条溝
				長径比	整 否	
初年目苗	①191.7	大	滑	2.1(短紡錘)	整	浅
	②104.0					
3年目苗	①170.8	やや大	滑	2.5(紡錘)	整	浅
	②110.2					
罹病苗	①245.8	中	粗	3.3(長紡錘)	否	深
	②178.9					

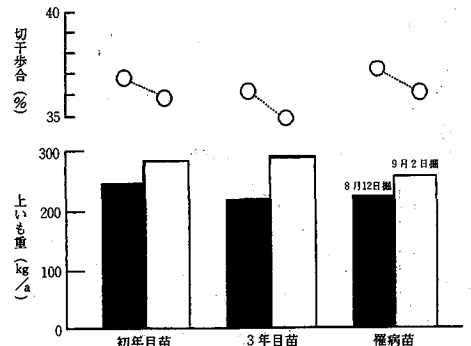
注) ①: 8月12日掘取り ②: 9月2日掘取り

試験2: 茎頂培養苗の利用によるいもの形状の改善をねらって検討を行った。地上部の生育量は、苗の種類にかかわらず掘取期が遅いほど少なかった。収量については、いずれの掘取期についても茎頂培養苗が多かった。初年目苗では、8月12日掘取りで220kg/a, 9月2日掘取りで280kg/aであった。切干歩合は掘取期が早いほど高く、茎頂培養苗が罹病苗より若干低下する傾向を示した (第2図)。しかし、いもの形状は、初年目苗、3年目苗とも外皮が滑らかでやや短紡錘形となった。また曲がり少なく、加工適性上問題となる条溝も軽微で罹病苗より外観的に優れていた (第1表)。このように、茎頂培養苗の利用は、既存の罹病苗に比べ収量に遜色がないばかりでなく形状・条溝など外観的特徴の改善にも有効であった。

以上の結果から、焼酎原料用をねらいとした8月下旬~9月上旬掘りのコガネセンガンの栽培法としては、茎頂培養初年~3年苗を利用し、a当たり420本程度を4月中旬植えとするマルチ栽培が望ましいと考えられる。



第1図 植付時期, 栽植密度と収量及び切干歩合



第2図 苗の種類と収量性